

教職課程におけるケースメソッド授業

川野 司

九州女子大学人間科学部人間発達学科、北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1 (〒807-8586)

(2011年11月1日受付、2011年12月5日受理)

要 旨

ビジネス・スクールで実践されているケースメソッドという教育方法を教職課程の授業に応用することを試みた。現在、大学では教員主導の講義形式の授業から、学生の学ぶ意欲を育てるための学生中心の授業が求められている。また、学生自身が、自ら学び、自ら考え判断して課題を解決していける即戦力・実践力を習得することも必要になっている。ケース教材を通して、学生が自宅で事前に自ら考えたレポートを準備し、そのレポートをもとに大学でグループやクラス全体で討論するとともに、将来の一人の教員として、また学校の組織人としての思考力、判断力、コミュニケーション力、人間力などの総合的力量と実践的指導力を培う訓練を目標にした。ケースメソッド授業で、どういう力が付いたかを尋ねたところ、「自ら課題に取り組み考えてまとめる力」、「思考力、表現力、発言力」、「レポートの整理力、書く力」、「問題発見力、対応力、柔軟な考え方」などの記述が多かった。ケースメソッド授業は、教員を目指す学生にとっては、学校現場に関わる実践的指導力と、教員としてのものの見方・考え方を身に付ける教育方法として効果的である。

1 研究課題の設定

本研究は、教員の一方的な講義から、学生の学びを育てる学生主体型授業の文脈に位置するものである。研究では、授業テーマに関わる具体的ケースを作成し、ケースに含まれる問題を考え、協議や討論を行う授業を構成した。研究を進めるにあたっては、ビジネス・スクールでのケースメソッドを形式的に授業に取り入れたものの、それは試行錯誤の連続であった。また学生は単なる授業を受ける側だけではなく、アクティブなパートナーであり、共同研究者であった。学生のケースレポートや授業評価に学ぶことも多く、その都度、授業を省察しながら、研究と実践を同時並行で進行していった。

一方、大学の学部生に対してケースメソッドを取り入れた授業はあまり行われていない。ケースメソッドは、ビジネス・スクールの大学院で行われている教育方法である⁽¹⁾。その代表例は慶応義塾大学ビジネス・スクールである⁽²⁾。そこで使用されるケース教材は、一般企業関係の経営学領域に関わるケースを教材にしたものであり、教育学領域のケース教材開発は行われていなかった⁽³⁾。ビジネス・スクールのケース教材は、教職課程の授業に取り入れられなかったが、その理念と方法論は取り入れることにした。また、教育学分野でのケースメソッ

ドに関する文献等が少ないなか、小学校校内研修でケースメソッドを用いた参加・体験型の教員研修の事例と関係論文を見付け、その関係資料を参考にしてケースメソッド授業への理解を深めていった⁽⁴⁾。

ケースメソッド授業では、ケース教材とインストラクターとしての教員の役割が、授業の善し悪しを決めると言っても過言ではない。ケース教材については次節で述べるが、簡単に触れておきたい。ケース教材は、学生が身近に考えることができ、自由に自らの意見や考えが出やすいように学校現場の体験を踏まえて作成した。と同時に、ケースメソッドの理論を背景にして、理論と実践が融合して学生一人ひとりがケース教材を自らの問題として解決していける力量形成を期待した⁽⁴⁾。この取り組みは、はじめての試みであり、ケースメソッドによる教授法は、現在求められている自ら課題を見付け、自ら考えて自ら学ぶという学生自身の「生きる力」に結び付くだけでなく、それを指導する側の教員にとっては、自らの授業を省察し、授業改善を図っていく具体的指針を与えるものと考えられる。ケースメソッドを取り入れた教育は、教職課程に関する領域の授業で実践されてなく、それだけにやりがいのある研究課題である。

また、教員養成課程では、教員になるために必要な知識や技術などが教職課程科目を通して履修されている。そして教員採用試験では、一般教養と教職教養および各教科の専門知識など、教員に必要な基礎的な知識と技能が問われる。さらに第二次試験では、実践的指導力としての模擬授業、場面指導、実技（水泳・体育・英会話など）、個人面接などが課されるとともに、教員として学校現場で指導ができるかどうかの適性、積極性、意欲、逞しさなどの性向や総合的な人間性などの資質能力が見られるのである。こうした情意面を重視する態度は、講義形式の授業だけでは十分に身に付くものではない。他の人々と協力して課題を解決する能力やコミュニケーション力などが、授業の中で育成される必要があり、そうした資質能力の育成には、問題解決型の討論授業が有効である。

筆者がケースメソッドは学生主体型授業に効果的であると考えた根拠は、平成22年度後期授業も終わりに近づいた12月頃であった。授業は少人数であったこともあり、集団討論を取り入れた授業構成を考え、それを進めていた経緯があった⁽⁶⁾。そこでは集団討論を行うことで、学生が積極的・主体的に授業に取り組む姿が観察され、授業アンケートでもそれを裏付ける客観的データが得られた。集団討論では、教員が授業テーマに関する討論題目を学生に提示して、それについて学生が考え、自らの考えを披露し、その後、各自のスタンスをもとに討論を深めていくものであった。

授業当日、討論題目を学生に与えたが、学生がそれを自らの言葉で表現することは可能であった。討論の深まりがあったかどうかについては、十分ではない場面も見られたが、前向きな自己評価をしている学生が多かった。その最大の理由は、学生全員が教員採用試験を受験しており、教員になることを目標にして学習を継続していたからであり、授業内容と方法

が学生の必要感に密着していたからだとも考えることができる。さらに学生は自らが授業に参画し、自らの意見や考えを表明できる場を求めていたとも言える。そういう意味では学生が自ら考え、仲間とともに協議し、考えを発表し、他の学生に考えや意見に触発され、お互いに切磋琢磨して成長していくことを望んでいたのである。

2 ケース教材について

ケース教材としては、授業テーマに関わる、小中学校で実際に起こっている問題を事例として考えた。ケースで取り上げられた事例のなかで、問題や課題として考えられることは何かについては、事例を読む学生一人ひとりの受け止め方によって違っていることが予想された。しかし、ケースを作成するライターには、そのケースのねらいは何か、ケースを通じて何を訴え、何を考えさせたいのか、ケースに登場する人物の人間関係上に問題点はないのか、など多くの問題と課題をケースから読み取ることが出来る内容にするとともに、ケースを一つの物語として構成することが求められる。このようなケース教材開発は、その作成に多くの時間と経験を必要とするが、先ず喫緊の問題として、A4サイズ1枚程度のケース教材の作成に努めた。

最終的には、その問題をどのように解決していったらよいのか、学生一人ひとりが自分のこととして考えていける力を培いたいと考えた。換言すれば、今後遭遇する出来事に対して、適切な判断と意思決定が迅速にできるようになることを期待した。ケースによる学習は、一定の解決策をマニュアルとして授けるものではなく、ケースを通じて、学生が自らどのように考え判断し、問題解決に向けてどのような具体的な行動を起こすのか、また他の学生の考えや意見を知り、自分で気付いていなかった新たな視点を自らの中に取り込むのか、さらには協議や討論を通じて、自分の考えが修正・変更されながら深化していく過程を実感することである。つまり、学習しているその場が、学びを実感する貴重な機会であり、学生が体験しているその瞬間の出来事が暗黙知として会得されているということである。討論という学習活動を通して、学生自身がいろいろなことを体験的に洞察しているのである。

一方、学生はケース教材を通して、学校で起こっている現実を目の当たりに実感するとともに、様々なことを自ら考えることができるようになる。ケース教材は具体的内容を物語風書いてあるので、学生には身近なものと受け止められる。身近であることは、学生は自分を物語の中に投影することが可能になり、自分ならばその問題解決に向けて、どのように対応したらいいのか分かりやすくなる利点がある。さらに同じような問題に対して、どのように行動するか意思決定について洞察する機会を経験していることになる。

さらに、ケース教材を通じて他の学生と協議して話し合う行為そのものに価値があるのである。このことは、グループ討議やロールプレイなど、体験を取り入れた学習活動が、学習者にとっては分かりやすいし、学ぶ意欲を高める効果があることから言える。こうしたこ

と以外にも、学生は一つのクラス集団のなかで学習活動を進めるので、そこには集団力学的な要因やいろいろな人間関係が発生しており、自らが望ましい集団づくりに貢献しようと努めると考えられる。それは、討論題に対する結論を集約する意味で、同じような発言をする危険性はあるものの、逆にそれまでの意見とは全く異なる考えを述べる機会を与えることにもなる。その意見によって、一定の方向に収斂していた結論が拡散していくこともある。

本来、ケースメソッド授業は、ケース教材に含まれる問題について一定の結論へと学生の思考を導いていく役割はあるが、必ずしも結論がでないオープンエンドに終わることもある。授業ではそうしたこともいいと考えている。学生がその場で語られたことを実感し、その時自らが何を思い、どう感じ、他の学生がどのような発言をし、それに対してどのような意見が述べられたのかなど、暗黙知の部分も多いからである。

一方、教員を目指す学生にとっては、人間関係の構築や対人関係スキルは最重要課題である。学生の生活空間の大半を占める大学を中心としたコミュニティ社会において、人間関係が不得手であり、人間関係を避ける傾向が見られる学生がいることも現実である。そのためか、就職活動において担当者とのコミュニケーションが十分にできなくて、面接で尋ねられた内容に対して、自分の考えをきちんと相手に説明することができない学生も見られる。

人とのコミュニケーションや討論、あるいは対話や会話は短兵急には身に付くものではない。気の合った友だちとは話ができるが、公式な場面で自らの意見と考えを述べることは簡単にはできないことである。そうしたスキルと態度などは、授業を通して培うことが必要である。これは講義形式の受け身の授業からは期待できるものではない。やはり、討論やコミュニケーションのスキル、人間関係を含む自他の感受性を訓練するには、その育成をねらった授業を構築していかなければならない。

将来、教職に就けば、児童生徒をはじめ保護者や地域関係者など、様々な人々との出会いがあり、そうした人たちとのつながりと人間関係の中で教育指導を進めていかなければならない。教員と児童生徒および児童生徒同士の好ましい人間関係を構築するには、その基礎的な部分を大学教育で担う必要がある。人との関係は経験を通して徐々に習得されるものである。経験は力ではあるが、そうした場を意図的・計画的に設計するのがケースメソッド授業の役割である。

3 研究内容

(1) 作成したケース教材

ケースメソッド授業で使用した13のケースは、経験をもとに脚色したものである(固有名詞と人名は仮名)。そのケース名を、次の表1に示す。

表1 授業内容と使用ケース一覧

第1回授業	ケースメソッド授業に関する説明
第2回授業	Case 1 学校の説明責任を考える
第3回授業	Case 2 学校保健指導計画を考える
第4回授業	Case 3 校内研修の活性化を考える
第5回授業	Case 4 教育評価を考える
第6回授業	Case 5 習熟度別指導と個に応じた指導を考える
第7回授業	Case 6 服装や頭髪の指導について考える
第8回授業	Case 7 特に配慮を要する子どもの指導を考える
第9回授業	Case 8 いじめにどう対応したらいいのか
第10回授業	Case 9 障害のある児童生徒の教育はどうしたらいいのか
第11回授業	Case10 道徳の時間の指導はどうしたらいいのか
第12回授業	Case11 生徒会活動を考える
第13回授業	Case12 孤立しがちな特別支援学級について考える
第14回授業	Case13 授業進度が遅れている先生への対応
第15回授業	ケースメソッド授業に関するまとめとテスト

(2) ティーチング・ノート

ティーチング・ノートは、①ケース名、②ケースの要約、③学習目的、④教育対象者、⑤教育方法、⑥指導に関する事項（質問・時間配分など）、⑦補助教材・参考資料などを、簡潔に記した教員のための授業計画案と言えるものである⁽⁷⁾。ケースメソッド授業を進める教員が、ケース教材を使ってどのように指導していくかについての大きな道標と考えられる。具体例として第3回授業のCase 2「学校保健指導計画を考える」を取り上げ、このケースに関するティーチング・ノートを、以下に提示する。

表2 Case 2のティーチングノート

ケース名	学校保健指導計画を考える。
ケース概要	学校では各教科、道徳、特別活動などの領域・分野において、校務分掌の責任者が年間の教育指導計画を作成しており、それによって教育活動が進められている。本ケースでは、学校保健指導計画が作成されていない事例を取り上げた。多くの学校では保健指導計画は作成されている場合が多いものと思われるが、それをPDC Aマネジメント・サイクル（計画・実践・点検・修正変更）の視点で見直した時、十分でない場合も予想される。そこで、夢と希望に満ちた山本瞳が採用された宮崎小学校では、前任の養護教諭は保健指導計画がなくても仕事に何ら不都合はなかった。経験と勘で仕事をしていたことが分かった。また養護教諭が保健主事も兼ねるようになっており、養護教諭は他の教員と連携して仕事をしていくタイプではなかった。瞳は学校が組織体なので、そうしたことは望ましいことではないと思った。新任であることもあり、自分への期待と迷いや葛藤を感じながらも、新しい風を起こしたいと考えるのであった。
学習目的	宮崎小学校の養護教諭の仕事を見直し、望ましい人間関係を築く。

学習対象者	養護教育専攻科1年生		
教育方法	<p>予習で考えた設問に対する回答について、代表グループがパワーポイントを使って発表をする。次に、1グループ5人の4班を編成し、各グループで各自が学習してきたケースレポートをもとにグループ討論を行う。その後、20人のクラス全体会では、先ず各班の討論内容を要約して発表して、その後クラス全体で内容を深める討論を行う。</p>		
指導事項	<p>ケースレポートを作成する場合に知っておいた方がよい学習内容(知識・キーワード)は次のものである。</p> <ol style="list-style-type: none"> ① 教員の好ましい人間関係とは、どういったものだろうか。 ② 一般に学校の文化、校風、雰囲気、空気などは、どのようにして形成されるのだろうか。 ③ 学校組織のそれまでのやり方を、一人の力で変えることは可能だろうか。 ④ 学校改善とは何か。 ⑤ 学校でのリーダーシップとはどうしたら発揮しやすいのだろうか。 ⑥ 校務分掌とはどのようなものか。具体的にはどのようなことをするのだろうか。 ⑦ 保健主事の仕事とは、どういったものがあるのだろうか。養護教諭が兼務した方がいいのだろうか。 ⑧ 学校力、学校の信頼感、PDCA、学校教育指導計画 		
補助教材 参考資料	<ul style="list-style-type: none"> ・川野司『実践! 学校教育入門』昭和堂 2011年4月 ・日本学校保健会『保健主事の手引き(改訂版)』ぎょうせい 2002年4月 ・学校保健安全実務研究会『新訂版 学校保健実務必携』第一法規 2007年3月 		
設問	<p>設問1 学校保健指導計画は、何のために作成するのか。また必ず作成しなければならないものか。</p> <p>設問2 学校での保健主事はどういう仕事をすればいいのか。保健主事が養護教諭を兼務することは望ましいか。</p> <p>設問3 養護教諭は孤立しがちだが、学校保健教育を推進するには、他の先生との連携や人間関係が不可欠である。養護教諭は、同僚教員との好ましい人間関係をどのように構築していったらよいのだろうか。</p>		
	学習活動・学習内容	インストラクターの支援・留意点	配時
	<p>1 出席と学習内容の確認する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習内容を確認する。 ・ケースレポートを提出し、次週ケース、授業評価シート、グループ討論記録用紙の確認後、本時のグループ編成を確認。 	<p>1 本時の学習目的を説明</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ケース作成の意図 ・グループ編成、プリント類配布、ケースレポート回収等は、学生が行う(欠席者へのプリントの保管)。 	5分

<p>2 担当グループが本ケースをプレゼンテーションで要点を発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・設問1～3の回答を説明する。 	<p>2 プレゼンテーションでよかった箇所を評価する。</p>	10分
<p>3 グループで討論をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人学習の内容を出し合う。 ・積極的に発言する。 	<p>3 各グループに入り、必要に応じて補足説明やアドバイスをする。</p>	30分
<p>4 クラス全体で討論を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループ討論の内容を発表する。 ・グループ内で解決できなかったり、意見が分かれた内容を報告する。 ・設問以外のケースに見られる問題点や課題を出し合う。 ・分かりにくい所を質問する。 	<p>4 設問を中心に学生の意見を板書する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・黒板を3つのパートに分けておく。(設問1～3を3パートに配置する) ・挙手して発言させる。 ・発言しない学生は指名して言わせる。 	30分
<p>5 授業のまとめをする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ケースの背景を理解する。 ・ケースの難しい所が分かる。 	<p>5 問題点や疑問点を具体例や体験談で補足説明する。</p>	10分
<p>6 授業評価をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・授業評価シート、グループ討論記録用紙を回収する。 	<p>6 個別的に授業内容を尋ねる。</p>	5分

(3) ケース教材例

Case 2 で使用したケース教材は、次のようなものである。

Case 2 学校保健指導計画を考える

瞳は九州女子短期大学の養護教育科を卒業し、見事、難関の平成23年度宮崎県教員採用試験を突破して、夢にまで見たあこがれの養護教諭としての内定が決まっていた。

平成23年3月24日に宮崎市教育委員会から電話があった。赴任校は宮崎市立宮崎小学校との連絡であった。その後すぐに、宮崎小学校の教頭先生から瞳に電話が入った。「もしもし、山本

瞳先生ですか。私は宮崎小学校の教頭の中村です。本校に来ていただけることを市教委から連絡を受けました。よろしく願います」と。瞳は高まる胸の鼓動を抑えながら「はい、山本瞳です。こちらこそよろしく願います」とドキドキしながら応答するのがやっとであった。

「今年の異動で、本校養護教諭が隣の小学校に転勤することになりました。山本先生には、本校養護教諭と事務引き継ぎをしていただきたいため、3月30日に学校に来てもらえませんか」との連絡であった。瞳は、「はい、分かりました。有難うございます」と、丁寧な受け答えをした後、相手が電話を切るのを確認してから電話を切った。その後、瞳は、はやる気持ちを抑えながら、宮崎小学校のホームページを見ながら、いろいろ情報収集を行った。そして、「そうだ。4月には健康診断があるかも知れない。準備をしなくちゃ」と、自分に言い聞かせながら、喜びでうきうきした気持ちにひたっていた。大学で使用したテキストや学校保健実務必携を見ながら、「よーし、やるぞー」と、いろいろな思いを巡らせていた。ふと気が付くと、30日は何時に学校に行けばいいのか、教頭先生から聞いていないように思った。それとも自分が聞き漏らしたのだろうか。宮崎小学校に電話で何時に行ったらいいのか尋ねようかどうか迷った。結局、当日は早めに学校に行けばいいと考えた。

瞳は、当日8時半に宮崎小学校に着いた。春休みのせいか、数人の先生しか目に付かなかった。早速、職員室に入り、教頭先生に挨拶をした。教頭先生からは、「養護の先生は9時に来ますので、しっかりと引き継ぎをお願いします」と言われた。「はい、分かりました」と瞳は伝えた。その後、養護の先生が来て、保健室で引き継ぎをすることになった。あこがれの保健室であった。部屋は雑然としていた。瞳は、「ここが自分の場所だ。しっかり頑張るぞ」と内心思った。養護の先生と事務引き継ぎをするなかで、瞳は不安になってきたことがあった。それは次のようなことであった。養護教諭によれば、本校では、保健主事は養護教諭が引き受けることになっているという。「大学で勉強しているから、できるでしょう。保健主事の仕事は、それほど特にする必要はないですよ。自分で考えてやればいいですよ」とさりりと言う。また、この学校ではきちんとした学校保健指導計画はなく、例年通りのやり方で実務をやっているとのことである。それで何も不自由はしていないし、管理職も何も言わないと言う。養護教諭は自分の経験をたよりに、これまで仕事をしてきたと言う。他の先生との連携もあまりしていないと話す。

引き継ぎが終わった後、瞳は教頭先生から、「新任で何かと大変だろうが、しっかりやってもらいたい。今年は、新しい養護教諭が来たので、学校保健を充実していきたい」と激励するのであった。その話のなかで、瞳は自分が学校保健で期待されていることをひしひし感じていた。これは大変な状態になった。保健主事の兼務もあるし、新任の自分にやれるだろうか、不安に思う瞳であった。

設問	<p>設問1 学校保健指導計画は、何のために作成するのか。また必ず作成しなければならないものか。</p> <p>設問2 学校での保健主事はどのような仕事をすればいいのか。保健主事が養護教諭を兼務することは望ましいか。</p> <p>設問3 養護教諭は孤立しがちですが、学校保健を推進するには、他の先生との連携や人間関係が不可欠です。養護教諭は、同僚教員との好ましい人間関係をどのように構築していったらよいだろうか。</p>
----	---

(4) 学生による授業評価

ケースメソッド授業について、学生がどう評価しているかを調べるために、表3の授業評価シートを作成して、毎回の授業に際して、学生による授業評価を行った。問1～問10までは、順序尺度として、「あてはまる」、「ややあてはまる」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」の4段階で回答を求めた。そして各回答に順次4点～1点を与え、統計処理を行った。また、問11は本日の授業の総合的な評定を点数（100点満点）で記載してもらった。問12は本日の授業の進め方や授業の成果物（良かったこと・ためになったことなど）について、また、問13は本日の授業のミニレポート（感想など）を、自由記述で記載してもらった。

表3 授業評価シート

23年度前期授業アンケート（ ）月（ ）日：専攻科（ ）年 氏名（ ）					
「ケースメソッド授業」について、各問に当てはまる番号に ○印を付けてください。		あてはまる	ややあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない
問1	あなたは予習を行いましたか。	4	3	2	1
問2	レポートは自分で書きましたか。	4	3	2	1
問3	小集団討論する時間の長さは十分でしたか。	4	3	2	1
問4	全体討論する時間の長さは十分でしたか。	4	3	2	1
問5	あなたは小集団討論で積極的に発言しましたか。	4	3	2	1
問6	あなたは全体討論で積極的に発言しましたか。	4	3	2	1
問7	あなたはこの授業に存在感がありましたか。	4	3	2	1
問8	あなたは自分で考える力や習慣が身に付きましたか。	4	3	2	1
問9	あなたは自らが授業に参画している実感がもてましたか。	4	3	2	1
問10	あなたはこの授業が楽しいと思えますか。	4	3	2	1
問11	この授業は100点満点の評価で何点ですか。	（ ）点			
問12	こうした授業の進め方について、あなたの意見を聞かせてください。				
問13	授業のミニレポート（感想など）				

(5) グループ討論の記録

ケースメソッド授業のグループ討論の様子を把握するとともに、グループ討論内容をクラス討論につなげるための記録を残すために、次の表4のグループ討論記録用紙を作成した。問1～14までは、授業評価シートと同様に取り扱った。グループ討論のミニレポート欄は、

各自が討論中のことを自由にメモしていた。



グループ討論

表4 グループ討論記録用紙

教職特論 第()回授業 ()月()日 学籍番号() 氏名()	
【グループ討論前】	
4:あてはまる 3:ややあてはまる 2:あまりあてはまらない 1:あてはまらない	
①私は個人学習(予習)ができています	4・3・2・1
②私は今日の設問に興味・関心をもっている	4・3・2・1
③私は今日の設問の内容を理解している	4・3・2・1
④私は今日のグループ討論に参加したい	4・3・2・1
⑤私は今日のグループ討論に貢献できると思う	4・3・2・1
⑥今日のグループ討論はうまくできると思う	4・3・2・1
【グループ討論後】	
⑦今日のグループ討論では、グループ全体としてうまくできた	4・3・2・1
⑧今日のグループ討論を通して、設問に対する私の理解が深まった	4・3・2・1
⑨このグループでまたグループ討論を行いたい	4・3・2・1
【グループ討論の貢献度】	
4:貢献した 3:やや貢献した 2:あまり貢献していない 1:貢献していない	
貢献度の意味は、「討論に楽しく参加した」「討論で発言した」「不明な点を質問した」「自分の意見や考えを述べた」「メンバーの発言を傾聴した」などです。	
⑩私自身	4・3・2・1
⑪グループ・メンバー()さん	4・3・2・1
⑫グループ・メンバー()さん	4・3・2・1
⑬グループ・メンバー()さん	4・3・2・1
⑭グループ・メンバー()さん	4・3・2・1
【グループ討論:私のミニレポート(まとめ・感想を含む)】	
<hr/> <hr/>	

4 研究結果

(1) アンケート調査から

ケースメソッド授業で、学生が意欲的に学び、積極的に授業に参画していたかどうかを判断するために、授業評価シート、グループ討論記録用紙、最終授業（15回目）に行った質問内容（表3）などをもとに、考察を交えながらまとめていきたい。

アンケートにおいて、「あてはまる」に4点、「ややあてはまる」に3点、「あまりあてはまらない」に2点、「あてはまらない」に1点を与えて集計した。「あてはまる」と「あまりあてはまらない」をまとめたものを学生の肯定的回答と考え、「あまりあてはまらない」と「あてはまらない」をまとめたものを学生からの消極的回答と考えることができる。

まず、ケースメソッド授業では、授業前に配布されたケース（ここではCase 2で考える）について、個人学習の予習を行うことが、授業の成果を考える場合に重要な前提条件である。そこで、総計13回の全授業に対して、各学生が予習を行ったかどうか（問1）を調べるために、各授業の20人の問1の平均点を出して、それをグラフに表した。

図1は、2回目～14回目授業毎に予習を行ったかどうかを尋ねた結果である。平均点が一番低い第14回目授業では、20名中3名が予習をしていなかったが（1点）他の17名は程度の差はあるが（2点～4点）、平均点では3点となっている。このような状況を踏まえて考えてみると、多くの学生が毎回の授業に対して授業前に予習を行っていたことが分かる。

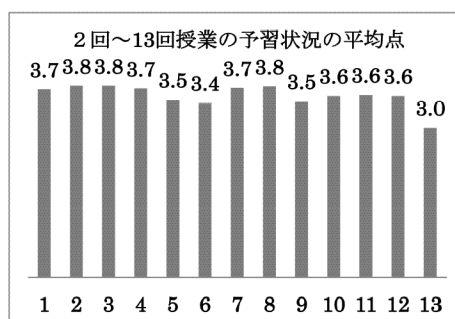


図1 予習状況の平均点

次に、ケースメソッド授業の様子を見てみよう。図2は、第3回目授業の問1～問10までの結果をグラフで示したものである。図2によれば、授業に対する学生の評価は、多くの項目が3点台で肯定的評価を示している。問4「全体討論する時間の長さは十分でしたか」は2.0点で、問6「あなたは全体討論で積極的に発言しましたか」は2.3点で、いずれも消極的評価であると考えられる

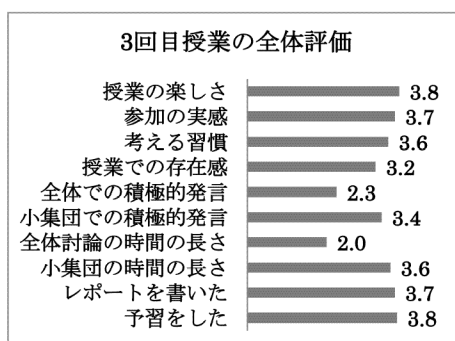


図2 授業の全体評価

授業当初はグループ討論の時間を20分としていたが、多くの学生から、グループ討論の時間が短いという声はあがっていたし、それは授業評価の結果からも裏付けられた結果になった。そうしたことから、4回目以降の授業では、小集団討論時間を30分に変更して行った

がそれで十分だった。

一方、クラス全体での討論は、教員がインストラクター役を務めるので、設問を中心に問いかけていったが、挙手して積極的に発言する学生がいる一方、発言にためらいを感じている学生もいた。そうした学生には指名をしたが、指名をすると、自分の考えをきちんと述べることは出来ていた。教員自身もケースメソッド授業でのインストラクター役は、どのように行ったらいいのか、試行錯誤しながら授業を進めていたので、こうした状況はしばらく続いた。

しかし、後半12回目授業では、学生から自分たちにインストラクター役と板書をさせてもらえないかという申し出があったので、担当学生2名にそれぞれの役割を担わせることにした。結果としては、板書の仕方も全体討論の進め方も、教員のやり方と違ってしたが、学生が司会進行を務めると、各自が発言しやすいという意見が寄せられたことも事実であった。

図3は、3回目授業でケース教材「学校保健指導計画を考える」を授業後の学生一人ひとりに、「この授業は100点満点の評価で何点ですか」を尋ねた時の回答である。二人の欠席はあったが、13人が80点以上の点数を付けている。なお18人の平均点は81点であった。授業の自己評価が低い学生もいるが、一番大きな原因は予習をしていなかったり、ケースレポートの準備ができていなかったことであると思われる。

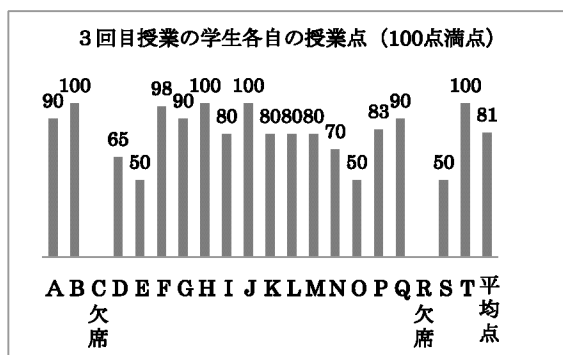


図3 授業の自己評価

図4は、「あなたは予習を行いましたか」(図A)と「レポートは自分で書きましたか」(図B)を尋ねた結果である。比較のために一つの図の中に2つのグラフを載せている。欠席者は学生CとRである。学生E、K、Oの3人は、図Aと図Bの得点が違うものの、多くの学生が、予習行い、設問に対する自分の考えをケースレポートに書いていることが分かる。

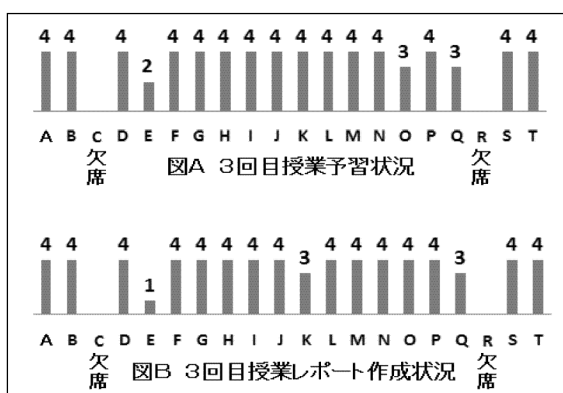


図4 3回目授業の予習とレポート作成状況

図5は、3回授業でのグループ討論記録のデータをまとめたグラフである。グループ討論記録用紙は、4パートから構成されている。

第1のパートの視点は、「グループ討論前」の状況を6項目で問うものであった。「私は個人学習（予習）ができています」（3.7点）、「私は今日の設問に興味・関心をもっている」（3.9点）、「私は今日のグループ討論に参加したい」（3.8点）の3項目が得点が高く、「私は今日の設問の内容を理解している」（3.1点）、「私は今日のグループ討論に貢献できると思う」（2.9点）、「今日のグループ討論はうまくできると思う」（3.1点）の3項目は、前3つに比べると、多少低くなっている。前者3つは、学生個人に関わる問であるから、自らの意思が強く感じられるが、後の3つは、他の学生の存在を意識しての回答であるから、控えめになっているように思われる。

第2のパートの視点は、「グループ討論後」の状況を問う3項目であった。「今日のグループ討論では、グループ全体としてうまくやれた」（3.5点）、「今日のグループ討論を通して、設問に対する私の理解が深まった」（3.6点）、「このグループでまたグループ討論を行いたい」（3.9点）とかなりの高得点であった。

第3のパートの5項目は、「グループ討論の貢献度」の状況を問うものであった。貢献度の意味は、「討論に楽しく参加した」、「討論で発言した」、「不明な点を質問した」、「自分の意見や考えを述べた」、「メンバーの発言を傾聴した」などを明示した。このパートの得点は、自分自身の貢献度は低く評定し（3.2点）、他のメンバーには高く評定（3.9点）する傾向がみられた。

第4のパートはグループ討論での質問を自由に書く欄を設けていたが、質問はあまりみられなくて、討論のメモ欄として活用していた。

第4のパートはグループ討論での質問を自由に書く欄を設けていたが、質問はあまりみられなくて、討論のメモ欄として活用していた。

第4のパートはグループ討論での質問を自由に書く欄を設けていたが、質問はあまりみられなくて、討論のメモ欄として活用していた。

（2）自由記述調査から

ケースメソッド授業に対する学生の生の声を得るために、15回目の最後の授業で4つの質問に対する自由記述での回答を求めた。

問1「ケースメソッド授業は、講義型の授業に比べてどういう点がよいですか」を尋ねたところ、「学生が参加し、授業を創造する、知らない指導方法を理解できた」、「意見発表ができ、他の意見が聞ける、積極性が付く」、「資料収集を通じて、知識獲得が可能、考える習慣が付く」、「授業後の遣り甲斐と達成感、充実感、まとめる力が付く」、「お互いの体験を知る

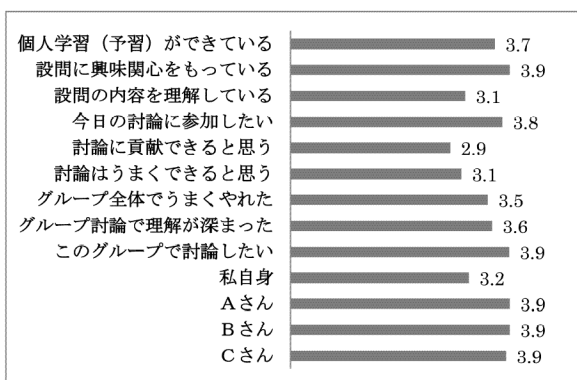


図5 3回授業のグループ討論記録

機会、常に頭を使う、ポーっとしない」、「発言しやすく視野が拡大、正解を求めない」、「知識が増え、表現力・プレゼン力が付く、アイデアが出る」、「教員採用試験に役立つ、実践的で現場に活かせる」、「相手の意見を傾聴し、内容が深まり興味関心が高まる」、「自分の考えや理解が深まり、新しい気付きがある」、「発見と驚きの連続、刺激的で向上心を持って取り組める」、「毎回の授業が楽しみ、興味深い、魅力的、主体的になれる」、「自分、友だち、教員が一体になれる授業」のような内容の記述があった。

問2「ケースメソッド授業で、どういう力が付いたと思いますか」を尋ねたところ、「自ら課題に取り組み、考えてまとめる力」、「積極的な発言と相手への共感力、傾聴力」、「他の意見を真剣に聞く、自分の疑問の解決」、「思考力、表現力、発言力、積極性、自信の獲得」、「ケース場面をリアルに考える」、「レポートのまとめ方、整理力、書き方、書く力」、「調べ学習の仕方、パソコン操作力、プレゼン力」、「問題発見力、問題解決力、対応力、柔軟な考え方」、「文章を理解し、分析し、考える力、読解力」、「違う視野で物事を見る、討論力、推察力」、「自分の意見を伝える力、相手から表現力を学べた」、「学校現場の様々な部分を知れた」などの記述があった。

また、ある学生は、「私は、この授業で問題解決能力と対応力が身に付いたと考えます。学校内でのケース事例を読み、ケースの状態を把握します。次に、ケース内での問題点、疑問点を挙げ、その解決策を探します。自分の意見・考えをまとめ、他の人の考えを参考にしつつ協力して問題の解決に努めます。実際の学校でこういったケースが起こった時も、他教員との協力と連携がとても大切になり、人の考えも受け入れられる人でいなくてはならないと思います。また、多くの事例をこなしたことによって、柔軟な考え方が出来るようになりました。人の考えに飲まれるのではなく、自分の意見の中に取り入れ、生かしていくということは、問題解決の場だけにとどまらず、人生の中で役立つと思います。さらに、様々な問題を知ったことで、働きはじめて、同じような事があった時に動じないはずですよ。そういった意味で、対応力が身に付いたと思います」と述べていた。

問3「教師教育の準備としてのケースメソッド授業は、どういう効果があると思いますか」を尋ねたところ、「自分の意見、考えをしっかり持てる、学校での具体的なイメージが持てた」、「小集団討論、全体討論で、自分の意見を発表できるようになった」、「教育相談等で児童生徒の話をもっと真剣に聞いて、一緒に考えられる。また、会議で相手の意見を受け入れ、自分の意見を言ってまとめることができると思う」、「将来同じようなケースに落ち着いて対応できる」、「問題の経過を復習し、整理することで、対応がスムーズに行えると思う」、「他に人との話し合いで、違った対応を知り、臨機応変な対応が出来る」、「人との話し合いや連携を取る大切さが分かった」、「連携協力し、お互いの意見や考えを尊重して、問題を解決する態度が付いた」、「保護者や職員の意見を聞き、自分の意見を伝えながら、信頼関係を築いていくことに役立つ」、「教員間でもコミュニケーション不足が多いので、いろいろな人とのコミュニケー

ションがとれるようになれる。職員会で自分の意見を持って臨める」、「ケースでは、様々な立場になって考えるので、他の人の立場や保護者の気持ちを少し知ることができたので、様々な場面で役立つと思う」、「教員として必要な対応能力、問題解決能力、伝える力などが身に付く」と回答していた。

問4「ケースレポート作成で苦労したことは、どんなことでしたか」を尋ねたところ、「自分の考えをレポートにまとめられなかった」、「養護教諭以外の立場になって考えるのが困難」、「設問の解答に苦労した」、「内容を読んで、資料が少ない時、考える方向や対策がよく分からなかった」、「ケースの疑問点や登場人物の分析が分からなかった」、「毎回考えなくてはいけないし、疑問点がたくさん出てきて、どうまとめたらいいか分からなかった」、「ケースに対する知識が足りなかったので、調べる作業にとっても時間がかかった」、「採用試験勉強とのバランスや時間に追われたりしたところが両立に苦労した」、「毎週難しいケースを一人で考えてまとめること」、「担任対応や授業方法については、ほとんど勉強してない」、「最初は課題解決の対応やアイデアが出なかった」、「パソコンでのレポート作成に時間がかかった」、「ケース内容を整理し自便の考えをまとめるのに苦労した」、「特別支援教育の内容では、本を読んだり調べたりに時間がかかった」、「時間との戦いと、あらゆることを予想してしまい、判断すべきことがたくさん出て考えがまとまらなかった」、「レポート作成に時間がかかりすぎて苦労した、一般教諭に関するケースが多かったので、どう対応したらいいか分からない部分もあったし、どのように養護教諭と結びつけたらいいか分からない時があって苦労した」、「他の教科のレポートや発表の順番が重なった時は大変でした」、「ケース内容を正しく把握し、それについてきちんとした知識を持つことに苦労」などと回答していた。

5 考察

今回、初めてケースメソッド授業に取り組んだが、この授業は、学生が自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、他の学生と協力し合って問題解決をしていく意欲を高めることができることを実感した。教員中心の一方的な講義型の授業から、学生中心の参加・双方向型授業への転換が図れる授業であることを確信している。その要は、学生のためのケース教材の開発と、教員のための授業用ティーチング・ノート（指導内容）を準備することが不可欠であると考えている⁽⁸⁾。

さて、教職特論を受講する学生にとってのケース教材は、授業テーマに関わる小中学校で実際に起こっている問題を取り扱った。ケースで取り上げられた事例のなかで、問題や課題として考えられることは何かについては、事例を読む学生一人ひとりの受け止め方によって大きく違っていた。例えば、受講者が養護教諭を目指している学生なので、養護教諭に関するケースを取り扱ってもらいたいという意見があった反面、学校は組織体であるので、担任や保護者及び関係者との協力や人間関係が不可欠なので、そうした広い視点からのケースを

学ぶことができ、本当に良かったという意見も多かった。

一方、ケースを作成するライターには、そのケースのねらいは何か、ケースを通じて何を訴え、何を考えさせたいのか、ケースに登場する人物の人間関係に問題点はないのか、など多くの問題と課題をケースの中に凝縮する必要があった。そうしたライターの思いは、ティーチング・ノートに表れてくるので、このノートの役割は重要になってくる。ティーチング・ノートの形式については、現在開発中であり、ケースメソッド授業を取り入れる他の教員に役立つ形式を考えていきたい。

また、ケース教材の作成では、ケースを一つの物語として構成することが求められた。今回はケース内容をA4判1枚に収めることを主眼に作成したが、枚数はA4判2枚ぐらいが適切ではないかと考えている。そこで、通常のケース内容の2倍のボリュームのケースを作成した事例もあった（Case 9 障害のある児童生徒の教育はどうしたらいいか）。そして、このようなケース教材開発は、その作成に多くの時間とエネルギーを必要とした。最終的には、ケースの問題をどのように解決したらよいか、学生が自分の問題として考えていける力を培うことを目標にしてケース教材の作成にあたった。また今後遭遇する出来事に対して、適切な判断と意思決定が迅速にできるようになることを期待した。現に学生の自由記述のコメントでは、教員が期待していたことを書いている内容も多かった。そうした学生の思いを真摯に受け止め、今後ともよりよいケース教材開発に取り組む考えである。

ケースメソッド授業は、一定の解決策をマニュアルとして授けるものではない。ケースを通じて、学生が自らどのように考え判断し、問題解決に向けてどのような具体的行動を起こすのか、また他の学生の考えや意見を知り、自分で気付いていなかった新たな視点を自らの中に取り込むのか、さらには協議や討論を通じて、自分の考えが修正・変更されながら深化していく過程を実感することである。つまり、学習しているその場が、学びを実感する貴重な機会であり、学生が体験しているその瞬間の出来事が暗黙知として会得されているということである。これがケースメソッド授業のポイントである。そして、学生はケース教材を通して、学校で起こっている現実を目の当たり実感するとともに、様々なことを自ら考えることができるようになる。ケース教材は具体的内容を物語風にしてあるので、学生には身近なものとして受け止められる。身近であることは、学生は自分を物語の中に投影することが可能になり、自分ならばその問題解決に向けて、どのように対応したらいいのか分りやすくなる利点がある。さらに、同じような問題に対して、どのように行動するかを意思決定を決断させてくれるのである。ケース教材を通じて他の学生と協議して話し合う行為そのものに価値があるのである。このことは、グループ討議やロールプレイなど、体験を取り入れた学習が、学習者にとっては分かりやすいし、学ぶ意欲を高める効果があることから言える。こうしたこと以外にも、学生は一つのクラス集団のなかで学習を進めるので、そこには集団力学的な要因やいろいろな人間関係を感じており、自らが望ましい集団づくりに貢献しようと努め

ると考えられる。それは、討論題に対する結論を集約する意味で、同じような発言をする危険性はあるものの、逆にそれまでの意見とは全く異なる考えを述べる機会を与えることにもなる。その意見によって、一定の方向に収斂していた結論が拡散していくこともある。

以上のように、今回のケースメソッド授業は、学生の主体的な学びを培っていくには、非常に効果的な学習方法であることが体験的に分かった。

注

- (1) ルイスB. パーンズ/C. ローランド・クリステンセン/アビーJ. ハンセン編著
高木晴夫訳『ケースメ・ソッド教授法』ダイヤモンド社 2010年
- (2) 竹内伸一著『ケースメソッド教授法入門』慶応義塾大学出版会 2010年
- (3) 慶応義塾ビジネス・スクールケース販売部 (平成23年8月8日現在)
<http://www/book.park.ne.jp/kbs/>
- (4) 安藤輝次編著『学校ケースメソッドで参加・体験型の教員研修』図書文化社 2009年
- (5) 田代空監修『ケーススタディ ー理論と実践ー』日本ケースメソッド協会 2005年
- (6) 拙著「集団討論を取り入れた学生主体型授業」九州女子大学紀要 第48巻1号
pp.15 - 31 2011年10月
- (7) 百海正一著『ケースメソッドによる学習』学文社 2009年 p.135
- (8) 岡田加奈子・竹鼻ゆかり編著『教員のためのケースメソッド教育』少年写真新聞社
2011年

Case Method in Teacher-training Course

TSUKASA KAWANO

Department of Education and Psychology, Faculty of
Humanities, Kyusyu Women's University
1-1 Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyushu-shi, 807-8586, Japan

Abstract

I applied to a teacher-training course how to teach the case method that is practiced in the business school. Currently in university, which is required to desire professorate to learn from a teacher-centered lecture to learner-centered teachings. Students also learn themselves, it is also important to learn practical skills to go to solve the problems to determine their own opinion. In that sense, creating a material case, the case method teaching debate to proceed around it, for the learner, educational method is an effective method to learn the practical leadership involved in schools. Students, through the case materials, prepare a case report previously considered themselves at home and advance the discussion in small groups or entire classes at the university based on the report. And the future, as one faculty member, a teacher who also collective organization, thinking, decision ability, communication skills, with the goal to cultivating the practical leadership training and competence such comprehensive human strength.

Key words: Case method, Teaching-note, learner-centered teachings